

水鏡
二編

ル 4
328
4



呂 328
門 卷 4

北越雪譜

二編 四卷

越後 鈴木牧之編撰 天保辛丑新刻

京山人百樹增修 書肆 寬裕舍藏

江戸 京水百鶴畫圖 發販



北越雪譜二編叙

北越雪譜六卷越後塩澤鈴木牧之先生

雪窗園燈寒燧隱几隨筆其事率出實脚

徒非構空架虛之談然翁固不必期於梓行矣

嚮者郵筒懇乞校正者之數劉蕙曼據擷菁

英先輯之卷以丙初編告翁使書肆文溪堂刊布

之於後越者之奇千彙萬狀供卧遊資錦室

婦妾市客妻婢以詳知越雪解士通人或云



雪譜二編

序一

格致之助爰以雪譜之名頗踴躍於是乎書
時類乞嗣撰蓋以知吾孫穉在也余謂不踏越地
不可說越事仍丁酉之夏推舟兒京水越遊救
十日有紀行作再採數條刪補少翁之孫穉以爲二
編稿定將置序言吾頃者晚暮連日放晴紅酣
綠戰花神旺壯遊心勃興欲詣賽成田山感怒王祠
以療雜毛之痼矣夫成田山香火之盛世々可知也凡
自江戸到成田者抵小細街橋岸一買搭船水路直

往行德都人皆以爲捷徑蓋行德一市會也不必成
田香火者搭船常蓋列于橋岸待行客是以俗呼
茲岸云行德河岸呼之爲船云行德船余亦臨此
搭船其所供載者多是庸界雜沓猥褻衆口味
嘈余傍在一僧一士一商僧年齒六十許徒一童偈
士可二十四五誇背轆後殆似學究商半老博撞
市樣相俱接膝余籍默不敢出一語瓦屋漸老每岸
芽茸櫻杏浮雪嫩柳吐烟村落春景百逞如畫

頗水行之會心也船既過半途庸舟多就賦
嘈々自羅窓之可悅壯士出墨斗持懷栝竟句果
是書生也老僧以鑿鏡披書士浴筆曰尊者所
孰是何書僧曰北越雪譜士曰僕嘗讀之免周冊子
何足_ツ閱僧曰貪_シ一錫_ヲ留_ニ北_ニ親_シ知_ル越_ノ雪_ノ故_ヲ特_ニ購_フ
供_ニ續_ス矣今_ニ閱_ル京_ノ山_ノ人_ノ序_ヲ彼_ノ少_シ識_ヲ乎士曰否_ニ不_レ抗
夫京_ノ山_ノ者_ニ文_ノ場_ノ之_ニ奴_レ隸_ス藝_ヲ苑_ニ之_ニ僮_レ儻_ス也近_ニ年_ニ隨_フ
乎_ニ裨_ス史_ノ院_ノ本_ノ之_ニ泥_ニ中_ニ汚_レ塗_ス姓_ヲ名_ヲ遂_ニ不_レ能_テ脫_ス其_ノ窠_ノ窟_ヲ

強_シ之_ニ彼_ノ自_ラ病_ス李_ノ漁_ノ金_ノ人_ノ瑞_ノ之_ニ流_ス亞_ノ文_ノ家_ノ爭_フ海_ノ
之_ニ矣_ト僧_ハ哈_ハ然_ト笑_シ而_{シテ}不_レ應_ズ余_ハ佯_ニ睡_シ以_テ之_ノ高_ヲ已_テ婦_ノ曰_ク鄙_人
書_ヲ愛_ス也_ト能_テ識_ル刊_ル行_ル之_ノ趣_ヲ凡_ソ上_ニ梓_ノ之_ノ書_ハ不_レ論_ス編_ス輯_ス之_ノ荒
誕_ヲ與_テ河_ノ孝_ノ之_ノ奇_ヲ雋_ト只_ハ以_テ多_ク瑣_ク爾_ヲ為_シ大_ニ著_ス述_ス奉_ス其_ノ作
者_ヲ為_シ搖_ス鉢_ス樹_ノ翁_ト強_シ感_ス服_ス顏_ト士_ハ秋_ノ書_ヲ若_シ其_ノ不_レ去_ス唾_ス
而_{シテ}不_レ願_ス是_レ書_ヲ梓_ノ之_ノ通_ス義_ヲ曹_ノ耦_ノ之_ノ常_ニ態_ス也_ト北_ノ越_ノ雪_ノ譜_ノ
初_ニ編_ス之_ノ梓_ノ一_ニ舉_ス數_ス七_ニ百_ニ餘_ニ部_ヲ刷_ス板_ヲ裝_ス本_ヲ至_レ不_レ暇_ス給_ス
故_ニ二_ニ編_ス刻_ス故_ハ免_ス爰_ニ有_リ近_ニ矣_ト士_ハ不_レ然_ス其_ノ言_ヲ拘_レ古_ノ不_レ止

鼓角頻敲僧手釋卷曰論說姑置足下藏京山
年否士曰不識僧曰我十年前亦與彼會於一精
舍僅得一面識不為無母緣言畢遽然拍余背
曰京山老人醒眠長兄忘我欵余悵然不得應時
船者行懷之岸舟中之人皆上岸不得如叨吐欵
于茲矣此夕縱言於逆旅燈下以為序云

天保十一年庚子潔序

京山人石樹并書



雖然彼自為李漁金人場之流亞文客筆許之乎
僧吟於笑而不應余佯睡引之高已姆曰鄙人書愛也
能識刊行之趣凡上梓之書不論編輯之荒誕與詞
章之奇雋只以多鬻為大著述奉之作者為碩芋路
儒雖感服韻士抄書若其不賣唾而不顧是書肆之
通義曹耦之常態也北越雪譜初編一梓一舉販七百餘
部刷板裝本至不暇給故二編刻後竟免當有近矣士
不然其言調舌不止鼓角頻敲僧手歎卷曰論說姑置

足下藏京山字否言不識僧曰十年前彼會於一精舍僅得一面識不為妻母緣言某處於余嘗言京山老人醒賦長元忘我欵余塔不不得意既加為行德岸舟中之人皆上岸不為某叻吐欵于茲此夕終之言於逆旅燈下以為序云

天保十一年庚子潔月

京山又百樹并書



北越雪譜二編凡例

此書全部六卷收之老人之賦を驅の漫筆梓を俟ざるの稿本あり故小走墨亂字一圖も亦中画あり老人余小示して校訂を乞ふ因て其駁雜を刪り校訂清書一圖ハ豚見京水小画一りの三卷書賈の請小應り老人小告て梓を許し以せ小布一發販一挙して七百餘部を鬻り是小依て書肆後編を乞ふ然ども余が机上宅の編筆小忙々屢稿を脱すの期約を失ひ由是近目務て老人が稿本の殘冊を訂し以其乞小授く收之老人越後の聞人あり嘗貞女朴實を以聞之屢縣監の廢賞を拜して氏の國称を許し生計の餘暇風雅を以四方小交る余が亡兄醒來別号八翁も鴻書の友あり由是余も亦是小嗣ぐ老人余小越遊を奨りこと年ふあり余固山水小耽の癖あり由是小遊心効きたまふ事小幼て果さる丁酉の晩夏遂小豚見京水を從り啓行是始り越後の諸勝を足さんと思ひ越地小入後年稍侵して穀價貴踊

雪譜二編卷之七

文英堂藏

人心程のむむゆふ越地を踐て僅小十がありあることども旅中小於て耳
目を新小せし事を奉て此書小増修も百樹曰とゆふの是之

前編小載する三國嶺の圖ハ牧之老人ハ草画小倣て京山私儲満山小松樹を
画り余越遊の時三國嶺を踰し小此嶺ハさうあり前後の連岳也（一）松を

見む此地小くむむ越後ハ松の少き國あり三國嶺を知り人ハ松を画しを笑ふ
也一是老人ハ本編の誤ハ非む京水ハ蛇足あり

山川村在ハさうあり凡物の名の訓ハ清濁小よりて越後の里言小たぐひするも
あべハ然とも里言ハ多く必訛あり今姑俗小从るあり本編ハ音訓の假名を

下さむかあづけハ余ガ必為あり謬を本編小驅こと勿き
余也固浅学小て多く書不讀寒家小て書小不富少く藏せも辱祝融小

奪て架上蕭然（二）より依之増修の説小於て此事ハ彼書小見しと覺も其書
を藏せむハ急就の用小弁せむ職（三）痒むるが多し且浅学あり引漏し

うらも最まうるべし

本編雪の外他の事を載するハ雪譜の名を空する小似しとて姑記して好事の
話抵小具を増修の説も亦然り

雪の奇状奇事其大槩ハ初編小出せり猶軼事有を以此二編小記を已小初編小
載するも事の異あり不舎して之を録を盖刊本ハ流傳の廣きりのゆゑ初編を

讀む者ハ為小むるの意あり前後を讀人其層見重出を話こと勿き
釋の字釈小作の外澤を沢驛を馭小作ハ俗ありあることども卷中驛澤の字迄

姑俗小从るハ馭沢小作り以梓繫を省く餘の省字ハ皆古法小从ふ
卷中の画老人ハ稿本の叶画を真（四）或ハ京水ハ越地小写し真景或里人の話を

聞し圖小作りするもあり其地小照して誤を責ることありと
老人編を嗣の意ありゆゑ小初編二編といふ前編後編といふこと

天保十一年庚子仲春

京山人百樹識

一之卷目録

越後の城下

古哥あゝ旧蹟

雪の元日

雪の正月

玉栗。羽子櫂

雪吹小焼飯を賣

雪中の戯場

家内の氷柱

雪中の用具

轡の説

寒氣の力

シガ

夏の雪

削氷

雪の多少

浦佐の堂参

通計十六條

北越雪譜二編 卷一

卷之一

越後塩澤

鈴木牧之編撰

江戸

京山人百樹増修

○越後の城下

越後の國往古ハ出羽越中ノ距リ一ノ事國史小見也今ハ七郡を以テ
 一國トシテ東小岩船郡古小岩小作蒲原郡新寫の湊此郡小屬す西小魚沼郡海小
 北小三嶋郡海小刈羽郡海小南小頸城郡海小古志郡海小以上七郡也
 城下ハ岩船郡小村上内藤侯蒲原郡小柴田溝口侯黒川柳沢侯三日市
 柳沢正侯 一万石陣營 三嶋郡小与板井伊侯刈羽郡小椎谷堀侯古志郡小長岡牧野
 七万四 千石 頸城郡小高田榊原侯糸魚川松平日向侯以上城下の外頗豊饒を為
 是処魚沼郡小千谷古志郡小三條三嶋郡小寺泊。出雲崎刈羽郡小
 柏崎頸城郡小今町。り蒲原郡の新寫ハ北海第一の湊也。ハ福地也。

北越雪譜二編卷之一

文政五年

善信とて三十五歳の時諱口小係りて越後小謫さる時小承元元年二月より後五年を経て勅免ありしども法を弘ん為とて越後小のまじしこと五年あり故小聖人の旧跡越地小残まり弘法廿五年御歳六十の時洛小飯玉たり越後小五年下野小三年常陸小十年相模小七年弘長二年十月廿八日遷化壽九十歳件の柿崎の哥も弘法行脚の時の作ありて

此外▲有明の浦▲岩手の浦▲勢波の渡▲井栗の森▲越の松原のまも古哥ありども他國のものなり名所ありてたゞ小越後とまきざりて

さて今を去夏天保十一年五百四十年前永仁六年戌のころ藤原為兼卿佐渡左遷の時三嶋郡寺泊の駅小順風を待玉ひ間初君との遊女をゆ玉ひ小初君が哥小ものおもひて路の浦の白浪も立ちふるるひありとて七きけ此哥吉瑞とありてや五年たつてのち嘉元元年為兼卿飯洛ありて九年の後正和元年玉葉集を撰の時初君が件の哥を入

とらと玉ひり是を越後第一の逸事とて初君が古跡今寺泊小在り里俗初君屋敷との貞享元年釈門萬元記との初君が哥の碑ありしが新破しを享和年間里人重修して今小存せり

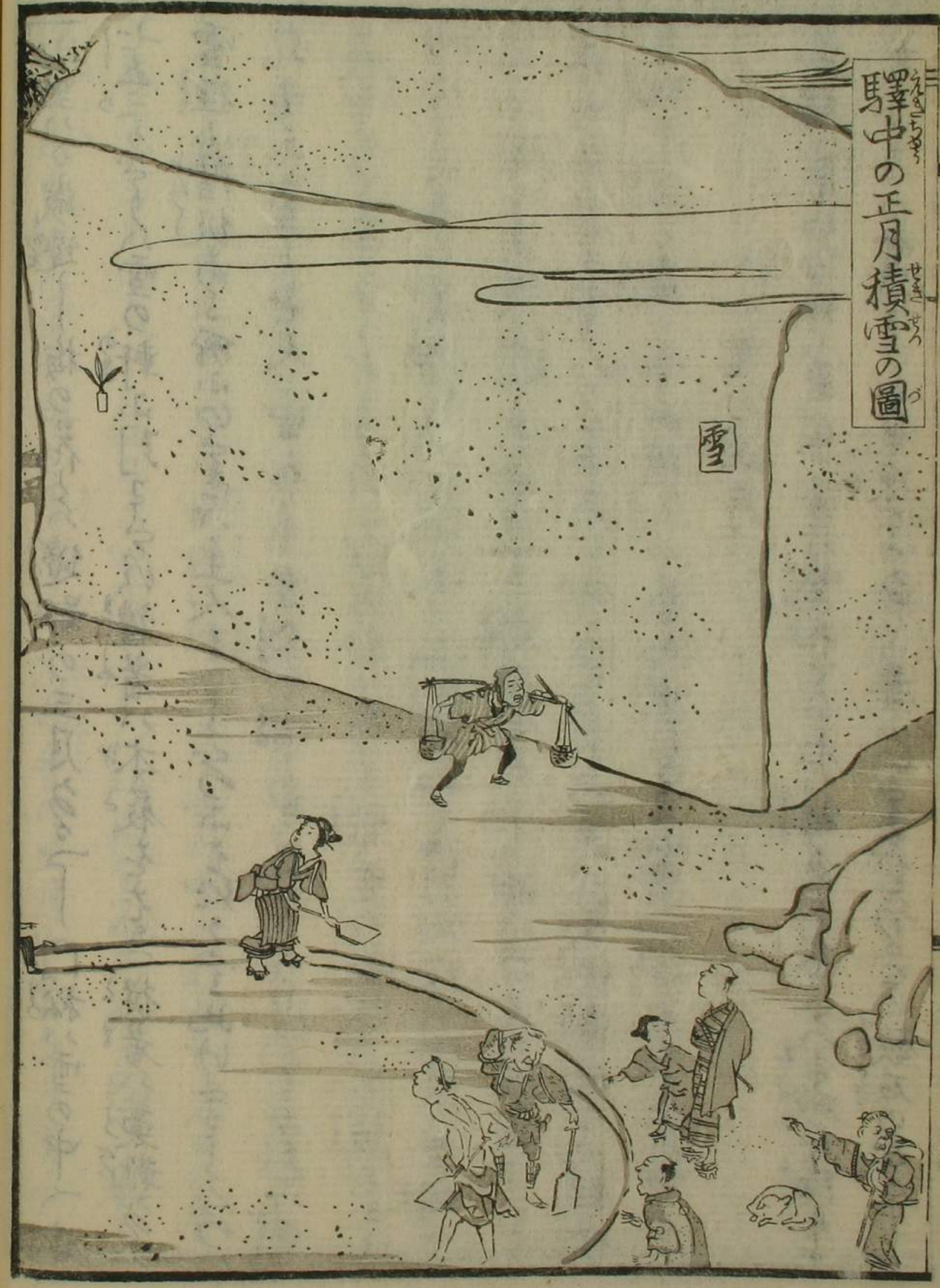
○雪の元日

凡日本国中不於て第一雪の深き国ハ越後ありと古昔も今も人のゆ事ありとてとも越後小於も最雪のふるること一文二丈小わりの我住魚沼郡あり次小古志郡次小頸城郡あり其餘の四郡ハ雪のつる夏三郡小比まると浅し是を以論をて我住魚沼郡ハ日本第一小雪の深降所あり我その魚沼郡の塩沢小生と毎年十月の頃より翌年の三四月のころまで雪を視事已小六十余年近日此雪譜を作ると雪小麓居のまきあり。さて我塩沢ハ江戸を去こと僅小五十五里あり直道を量ハるや近うて雪のた時ハ健足の人ハ四日ありハ江戸小

いづるがー其江戸の元日を聞かば
 緋神朱門の夏はあつて市中八千門
 万戸千歳の松をかざり直る
 御代の竹をたて太平の七五三を引よ
 る小新年の賀客麻上下の肩をつつ
 往來をさす小万歳もうち
 まどつきの女太夫とら鳥追ひの三味線
 小めぐるた哥をうらひ娘の児の
 やり羽子男の児の帝鷲見よりの
 聞のめださるふ初日影花や
 小さー昇る實小新玉の春こそ
 けつげと其元日も此雪国の元日も
 同元日あとも大都會の繁花と
 邊鄙の雪中と光景の替り事
 雲泥のちひひあり○そもく我里の元日
 只野も山も田圃も里も平一
 面の雪小埋り春を知つて庭前の
 梅柳の類も去年雪の降る秋の末
 小雪を厭く丸太を立く繩縛小遇
 するま雪の中ふありて元日の春
 をあつてささる人も三四月ふ
 ころさる梅花を不見翁が向ふ
 春も
 指景色ととのふ月と梅と吟ぜり
 大都會の正月十五日ありまこ

山里さんりは万歳ばんざい邊へ梅の花と六邊ろくへん鄙びの三月あるがー門松かどまつは雪の中へ建た
 七五三しちごさんころざりハ雪の軒のき小引こひきころは禮者れいしやハ木履ぎぞををき從者じゆしやハ藁靴わらぢあり
 雪徑ゆきぢやう小階級こかいけいある所ところふいふまは主人しゆじんもころころふをたたく此こげこころころのハ
 礼者れいしやふくまてむ人々皆みなあつり雪ゆき全く消き了り夏なつのころめふいふころころ草くさ
 履ひきをさく事ことあつてむささる元日の初日影はつじつかげも惟ただ雪の銀世界ぎんせかいを照てらすのミ
 一つとて春の景色けしきを不見み古哥こ小こ花をのミ待まちらん人ひとふ山里さんりの雪間ゆきまの
 草の春を見せむややとハ雪ゆき浅あき都みやこの事ことせり雪国ゆきくにの人ハ春はるふころ
 春をさくころをのミつて生涯しやうがいを終まつてををむハ繁榮はんりやう豊腴ゆゆうの大都會たいとくわい
 小住こぢころ羊やうころ歳さいころ梅柳ばいりゆう煥色くわんしきの春を樂たのむ事こと實小じつこ天幸てんしやうの人とつら
 ○雪の正月

初編しよへんふもいづる如く我國わがくにの雪ハ鷲毛じゆまうををさる稀まあり大々たいたいハ白砂はくさを降ふせか
 如く冬ふゆの雪ハさく小凝凍こていどうとさく春はるふいふまはとわること鉄石てつせきのごころ



雪
 積雪の正月
 中の驛

雪言二外巻一

文海堂

冬の雪のこりつぎるハ濕氣あり乾る沙のごとくつるゆゑあり是暖国の
 雪ハ異処ありあることとわづらひつゝあるハ雪解とさるのそとあり
 春ふりつても年ふりつてハ雪の降こと冬ふりつても積こと五
 六尺ハ過ぎ天地ハ陽氣有を以てあるべしさる春の雪ハ解るも年
 ちつとも雪のふるまはる年ハ春も屋上の雪を掘ことあり掘る木
 木ゆく作りする木鋤ゆく土を掘ごらして取捨るを里言ハ雪を掘と
 いふハハ初編ゆもりりかやふせさる雪の重小屋を潰ゆありされバ
 旧冬の家毎ハ掘除る雪と春降積る雪と道路ハ山をふること下ハ
 ららる圖をえてもあるべしつゝこの家ゆても雪ハ家よりも高ゆ春を
 迎る時ハつゞつゞつろよよ日光を引んてハハ明をとる処の窗ハ透る雪
 を他処へ取除るあり然る時とてハ一夜の間ハ三四尺の雪ハ降るハ
 らる家内薄暗心も朦ととと雑糞を祝ふとあり越後ハさる

北国の人ハさる雪の中ハ正月をさるハ毎年の事とさる正月ハ暖国
 の人ハさる雪の中ハ正月をさるハ毎年の事とさる正月ハ暖国

○玉粟

江戸の見曹ハ春の遊ハ女見ハ備毬羽子擲男見ハ紙鴉を揚さるハ
 我國のごともハ春ふりつても前ハつゞつゞ地とて雪ありさる如
 けさる歩行ハ苦く路上ハ遊をふる事少くハ玉粟とハ見戲
 あり春の中ハ始ハ雪を成る雜卵の大きハ握りて其上へ
 と雪を幾度もひく足先踏堅あるハ柱ハあてて壓堅ことを肥
 いふさる手毬の大きハありする時他の童ガ作りする玉粟を底下ハ置
 しめ我ガ玉粟を以他の玉粟ハあらあつて強き玉粟弱き玉粟を碎くを
 りつて勝負を争ふ此戲ハ小トつゞ。コンボウ、コマ。地独樂。雪玉の
 里ハ雪を。スゴ。玉ゴシヨ。勝合とらあり此玉粟を作るハ雪ハ少く

鹽を入るは堅あると石の如くは小兒互に塩を入るを禁むるありを以てする時ハ塩ハ物を堅むる物あり物を堅實小するゆゑ塩藏小をこハ肉類も不腐朝夕嗽ハ塩の湯水を以てするハ齒をこるゆゑ齒の命を長くせしむ玉粟ハ見戲あると塩の物を堅むる證とみる小たまり故小あつ小記せり又童のあそび小雪堂といふ夏あり初編小いせり

○羽子擿

我里俗を移をつくとりむをを
ふとといふうちをのこる

江戸小正月せ一人の話小市中ゆく見上るむより松竹を飾するも小美しく粧ひる娘より彩る羽子板を持つ並び立る羽子をつくるさぬいふも大江戸の春ありとぞ我里の羽子擿ハ邊鄙といひあつかる艶姿小あつど正月ハ奴婢ども少ハ許す遊をあつむるゆゑ羽子を擿んとくまづ其処を見とて雪をふくあつ角力場のごとくふあ羽子ハ渡路を一すゆと筒切小ありこも小鶴雄の尾を三本さしりる

江戸の羽子小比は甚大ありこもを擿小雪を掘木鋤を用ふ力小するせて擿ゆも小空小あつ夏甚高しやう小大ある羽子のあつ小童ハまどらむあつこもする男女うちまどらむもきこつるあつ小此戲をるをあり一ツの羽子を並びさつてつゆあつあつ取落しるものハ始小定ありとあるハ雪をうちつけ又ハ頭より雪をあつるその雪襟懐小入りて冷小耐ざるを大勢か笑ふ窓よりこもを視るも雪中の一興あり京傳翁が骨董集小上編下学集を引く羽子板ハ文化十二年より三百七十年むよりの前文安のころありゆゑのゆゑをこつりもあつきたりあり事ハ詳あるとこいひせり又下学集小羽子板小コゴイタと両かちをつけしこもの子といふも羽子の夏ありとあり我

○雪吹小焼飯を賣

塚山嶺雪吹圖



雪譜二編卷之上

文藻堂藏

の風雲
まぐ



雪譜二編卷之上

八

文藻堂藏

雪国より凍懼物、冬の雪吹。ホウラ春の雪顔あり、此奇状奇事
 已小初編あり、りりききど一奇談を聞するゆゑ、小ありて暖国
 の話柄とせ。〇をもち、金銭の貴と魯氏が神銭論、小尽く、なまば
 今さういふべし、もあゝ、年の凶作、いれとより、事小臨て、餓小い、る時
 小判を甜く、腸ハ彭張を、餓る時の小判一枚、飯一碗の光を、るさば
 五十余年前の饑饉の時、或所より、餓死し、る人の懐小判百両
 あり、とさうぬ。〇を小我が魚沼郡、敷上の庄の村より、農夫一人
 拍寄の駄小い、る此路程五里計あり、途中あり、一人の芋徳商人
 小遇、路伴小あり、往けり、時ハ十二月の、もどりあり、数日の雪
 も、此日晴、まば、兩人肩を、る、心朗小を、り、あ、り、已小塚の山、との
 小嶺小さ、り、かじ、時雪国の恒、と、晴天、俄小凍、雲を、布暴風、四方の
 雪を吹散、して、白日を覆、ハ咫尺を、弁せ、袖襟、雪を吹入、と、全身

凍へ息もつ、ま、あ、む、大風、四面より、ま、り、雪を、渦小、巻揚、る、是
 を、雪国より、雪吹、といふ、此、ま、り、不意小あり、ものゆゑ、晴天、といふ、とも
 冬の他行、あり、必、蓑笠を、用、る、こと、我國の常あり、二人ハ、橋小、雪を、漕、つ、
 雪小、あり、互小、声を、う、け、り、助、あ、り、辛、く、嶺を、逾、る、小、商人、農夫、小、い、
 里、言、小、ら、ど、互、小、声を、う、け、り、助、あ、り、辛、く、嶺を、逾、る、小、商人、農夫、小、い、
 かり、今日、の晴天、小、柏寄、ま、り、何、とも、い、は、ざ、り、ゆゑ、辨當を、り、と、今
 空腹小あり、ん、心、寒、小、堪、む、か、く、て、貴殿小、伴、り、雪を、漕、こ、る、と、さ、い、
 せん、の、話小、を、さ、る、の、懐小、弁當あり、と、ま、り、ぬ、夫を、我小、与、り、な、ま、り、ま、り、
 惟、り、貫、小、ま、り、こ、り、小、錢、六百あり、死、り、活、る、際、小、い、り、て、此、錢を、何
 ろ、せん、六百あり、弁當を、賣、玉、といふ、農夫ハ、貧、乏、の、者あり、ゆゑ、
 六百と、ま、り、大、小、より、こ、り、焼、飯、二、つ、を、出、り、六百の、錢小、替、け、り、商人
 ハ、懐小、あり、て、温、の、さ、ま、り、焼、飯、の、大、多、を、二、つ、食、り、雪小、咽を、潤、く、
 精、心、健、小、あり、前、小、ま、り、雪を、こ、り、け、り、〇、か、く、て、い、を、り、雪小、吹

まま〜甚〜様を穿ゆゑ道避く日も已小暮あんと此時小い
 ころ焼飯を賣る農夫ハ肚減て勞と商人ハ焼飯小腸満足を
 り〜往農夫ハ屢後ゆゑ終ゆハ棄〜独先の村小い〜の家小
 入り〜炉辺小身を温〜酒を酌始〜蘇生〜を〜けり
 〇さてあ〜〜ありて〜と呼聲遠〜聞〜を家内の者き〜つけ
 け〜雪中の常と〜雪吹倒〜と助けよ〜近隣の人を〜
 よび集め手毎小木鋤を持〜木鋤を持ハ雪小埋りし雪吹た〜の
 あり〜大勢の一人の死骸を家の土間（昇入〜）をの商人も立寄
 見えハ最前焼飯を賣る農夫ありしと〜の芋徳商人或時余が
 俳友の家小逗留の話小件の事を語り出〜彼時我六百の錢を惜
 焼飯を買〜ハ雪吹の中小餓死せん〜の農夫が如〜今
 日の命も錢六百のうちあり〜と〜笑ひ〜と俳友が語〜

○雪中の戯場

五穀豊熟〜羊の貢も心易く捧げ諸民鼓腹の春小遇〜時
 氏神の祭あ〜小遭〜を幸小地芝居を興行する夏あり役者ハ皆
 其処の素人あ〜ハ近村近駅より來るあり師匠ハ田舎芝居の
 役者を備ふ始小寺あ〜群居〜狂言をさ〜のち〜の
 役を定む此群居の議論紛〜と〜一度あ〜果〜事定
 り〜のち寺小於〜替古を〜む技熟〜のち初日をさ〜衣裳艶
 のる〜是を借を一の業と〜のあり〜物の不足〜此芝居
 二三月の頃ある事あり此時ハ〜雪の消ぎる銀世界あり〜
 芝居を造る処此役者等が家ハ〜あり親類縁者朋友より人を
 出〜あ〜人を備ひ芝居小屋場の地所の雪を平ら〜踏か〜
 舞臺ハ花道樂屋棧敷のる〜皆雪をあ〜その形〜

ありよく造ること下の圖を見て知るべし此雪少く造りたる物天又人
工をたぎけて一夜の間凍く鉄石の如くふるもあつたやど大入小ても
まじきの崩る氣づひあり一弥生の頃ハ雪もや稀るまじき春色の空
を見り家毎小雪圍を取除くころあまじく処より雪かこひの丸太あ
るハ雪垂とく茅少く幅八九尺廣さ二間をりふつりたる簾を借
あつめとくまての日覆とあまじく花とくハ雪あて作りたる上小板を
あつめたる此板も一夜のうちに小氷つまき釘付小あつりより堅く暖
国小比ま論の外あり物を賣茶屋をも作りつるあまじく平一面の
雪あまじく物を煮処ハ雪を窪め糠をちりり火を焼ハ雪の解る事
妙ありのまて戯場の造作成就して春の雪ありつる連日晴を
見む興行の初日のびる時ハ役者ふありたる家ハさく此志をわを見ん
とく諸方小返函の客多く毎日空をあらめて晴を待つる客のゆへ
あつてもあつて始倦果終ハ役者仲間いひあつせ川の氷を碎
て水を浴干垢離して晴を祈るもをり

百樹曰余丁酉の夏北越小遊びく塩沢小在一時近村小地芝
居ありと聞く京水と俱小至り小寺の門の傍小杭を建て横
小長き行燈あり是小題して曰當院屋根普請勸化の為本
堂小於晴天七日の間芝居興行せしむるものあり名題ハ假名
手本忠臣藏役人替名とあり役者の名多くハ寢名あり
寺の門内小假店あり物を賣り人群をあらま芝居小假小
戸板を集く圍入り口あり小守る者あり一人前何程と
價を取こき屋根普請の勸化あり本堂の上り段小舞臺を
作り掛左小花道あり左右の棧敷ハ竹林簀薦張あり土間小
薦を布筵をあらま敷の芝居大槩ハかくの如くと市川白猿話

聖国は椽
桐ふ
画者不
知く
系うけ

寺



五言二編卷之二

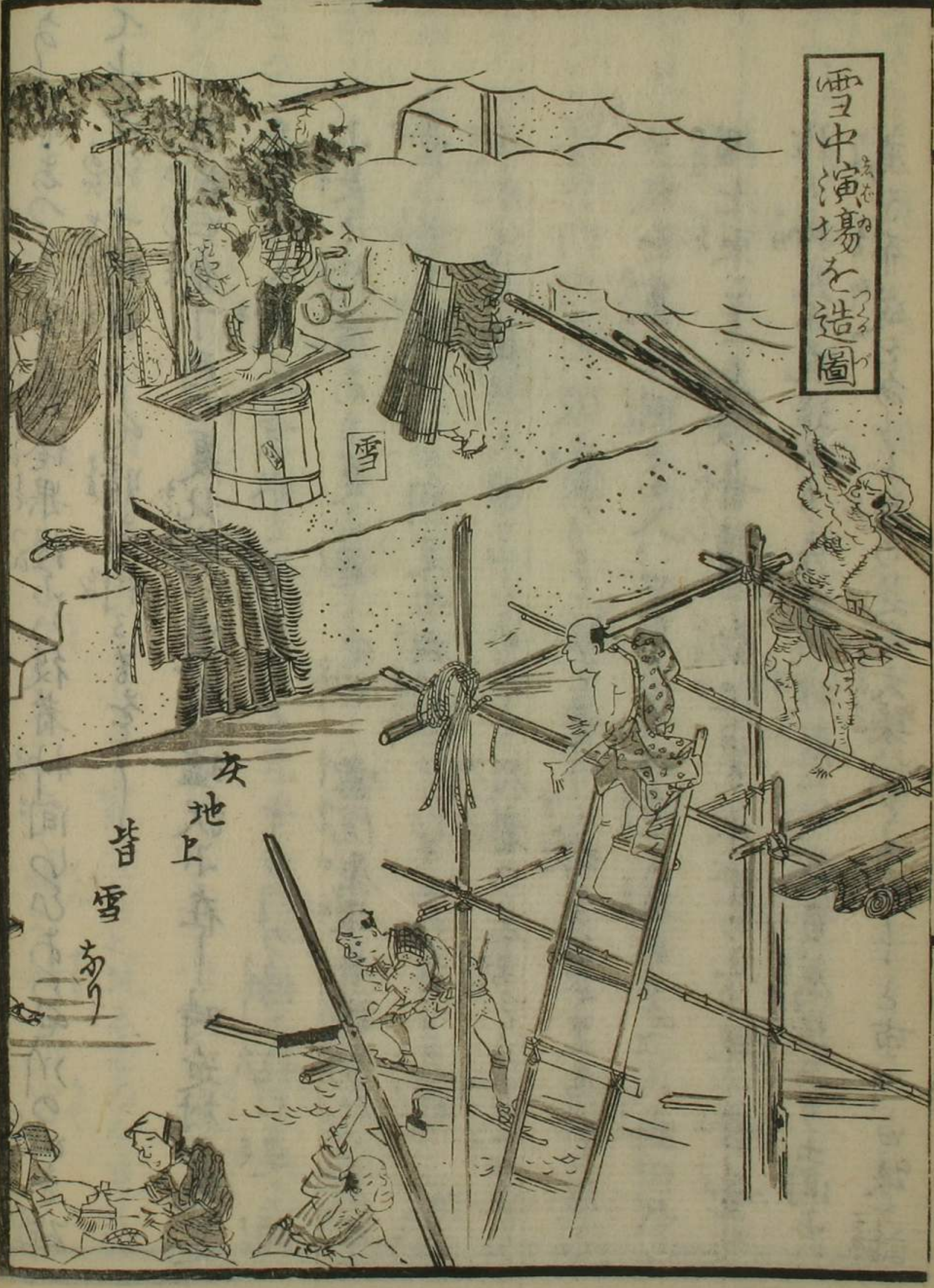
十二

山東府 滏陽

雪中演場を造圖

雪

地上
皆雪あり



五言二編卷之二

山東府 滏陽

小もきうぬ棧敷のらかこ小欲然やうの毛氈をうけらる小彩色
 画の屏風をたてしけのをきあり四五人の婦も綿帽子さる
 邊鄙小古風を失ざる観人群をうて大入ある猿の如き童ども樹
 小のわけてもあり小娘が笊を提ぎ氷とよび土間の中を賣る
 笊のあつ木の青葉をきき雪の氷の塊をうる茶を賣つさを氷
 を賣る甚めづし氷のこと削氷の條ふらへて口上りひ
 出く寺へ寄進の物あひハ役者へ贈物餅酒のふ一人の名を
 奉品を呼く披露一此処忠臣藏七段目をくまりとらひ幕開
 ちかす小折し岩井玉之丞とく田舎芝居の戯子あつて頗る美
 あり由良の助小折し余が旅中文雅を以識人あり年若あれバ
 かる戯をもあをあるづ常あつる今テの坂東彦三郎小似
 たり技も又観小足り寺岡平右門小ありハ余が客舎小きく笠頭

ありこまも常小かをり関三十郎小似て音声もま天然と関三の
 如し余京水と相顧て感し京水たつと小イヨ尾張屋と答ける尾
 張屋ハ関三の家号ある事通トぐまや尾張屋とやむものひたりも
 ろ一幕あつとせし小守る者木戸をいささ便所ハ寺の後小
 あり空腹あつバ弁當を買玉取次やさんとし我のふあつ人
 又いさだおつ小人散ハ演場の蕭然を厭ふあつるづしけくわ
 出所あつんと尋し小此寺の四方垣をめぐり出へきの隙し折
 ろ童が外より垣をやがり入りたるその穴より西人づりりハ
 こまも又可笑一ツあつてあり

○家内の氷柱

旧冬より降積る雪家の棟よりも高く春小ありても家内薄暗さ
 め高窓を埋る雪を掘のけり明をとるこ前小ありしが如し此

屋上の雪ハ冬のうちに悉く掘のつ度々小木鋤こすきのつらつらに屋
 上を損やぶむる変あり我國の屋上もやうな板葺いたぎあり屋根板ハ他国
 小比こひまは厚く廣く葺かける上小筭木さんぎといふ物を作り添石そくを置おく
 鎮しづと風を防かぎの便たすとてこまゆふ雪をやりのつとどもほくま
 ことありどその雪のうへ早春の雪ありつり凍こゆふ屋根のやぶ
 ことをあつて春も稍深ややふかまるま雪も日あつて解とける焼火やきびの所雪早
 く解とける小いこつらつかの屋根の損やぶとる処木羽こたの下したをうづりあて
 雪水漏ゆきずゆふ夜中よるな俄い小畳こ畳をとりのけ桶鉢おけのつらあつてをうづ
 て漏ゆをうづるもの処を修治しゆぢとる小雪こゆき全くまえざるゆふ手をうづて
 変ありど漏ハ次第しだい小つり座敷ざしきの内小いうちをもちも大なる氷柱こを
 見みる時あり是暖国ぬるくにの人小足こあしせうとせおひつる

百樹曰余越遊ひゃくじゆいづして大家の造りやうを見みる小楹こやまの太ふく江戸の

土藏どぞうのごとく天井てんじやう高く欄間らんま大ありとて雪の時ゆきのとき明あをとる
 とありあり戸障子と骨太こつくして手丈夫てぢやうぶあるゆふ國鴨柄くに鴨柄も廣く
 厚あつくしてまづ大材おほいを用もちる事目を駁おせりて皆雪小潰ゆきこつぶざるの
 用心こころありとて江戸の町小いまちの店下みせを越後小雁木えちごがんぎといふ雁木の
 下廣くしたくして小荷駄こひやだをも率ひへきやとありとてハ雪中ゆきなか小の庇ひ
 下したを往來ゆきの為あり余越後よえちごより江戸へ飯いの時高田の城下たかだのじやうを通と
 へへ北越第一きたえちごの市會いちあり高工軒たかこうけんをうづる百物備ひゃくぶつさるつと
 の一ひと兩側一里余庇下りやうつとつとの中を往ゆと甚こ意快いありき
 文墨ぶんぼくの雅人みやびも多おほくときじが旅中りよちゆう年の凶あまる小遭飯家こぞういけを急いそじ
 ゆふ刺さを入いれとてしハ今小遺憾いまこゆいとて

○雪中歩行ゆきなかの用具ようぐ

雪中歩行ゆきなかの具ぐ初編はつ小其圖こを出いししが製作せいさくを記しさるゝあつてび

右の外男女の雪帽子雪下駄其餘種々雪中歩用の具あまごも薄
雪の国小用ある物小似するはる小省く



百樹曰余
北越小遊び
牧之老人が家小
在し時老人
家僕小命とて雪を漕
形状を見せしる京水傍小
ありて此圖を写り穿物ハ
の機。縫あり戯小穿てしる
一歩も進ことあはるば家僕かあめは馬を御するごとく

○ 轄

轄 字彙 禹王水を治し時戴する物四ツあり水小舟陸小車泥小
轄山小標 註書經 志うとバ此轄といふもの唐土の上古よりありそり
彼ハ泥行の用ありとバ雪中小用ありとバ製作異なるバ轄の字美
○ 絶。棧。秋馬諸書小散見を或ハ。雪車。雪舟の字を用ふる俗
用あり

そもく 此轄といふ物雪国第一の用具人力を助事船と車小同く
且小作事最易きハ圖を見て知るバ 堀川百首兼昌の哥小
初深雪降小けくくあはるち山越の旅人轄小のるまにこの哥をの
くも我國小そりをつらふの古をまらるバ 前小も志をくくくく
我國の雪冬ハ凍さるゆゑ冬小轄をつらハ雪小あちりく撞くとな
らド轄ハ春の雪鉄石のごく凍さる正三三月の間小用ふべきものこ

其時小舟を里俗輜道小ありしと云
俳諧の季寄小雪車を冬とまると云ハ詠よりさまじく雪中の物あり
春の季小ハ似氣あり古哥あも多々ハ冬小あり實ハたがふとも
冬とて可あり

輜ハ作り易物也名わゆる農商家毎小是を貯ふさまじく載るもの小
よりく大小品々あり作り易ハ皆同ト云あり名も又あり只
大なるを里俗小修羅と云大石大木をのこるあり

山々の喬木も春二月のころハ雪小埋りたる梢の雪ハ稍消て遠目あり
見ゆる之此時薪を伐小易けし農人等わゆる輜を拖て山小入る或ハ
そりを小簾小置もあり常ハ見上る高枝も埋りたる雪を天然の足
場とて心の休小伐とり大なるハ六把を一人まると云ありさて下小三把
を並べ中ハ二把上ハ一把と云を繩ゆる強く縛り簾小臨み蹉跌小

凍る雪の上ありて幾百丈の高も一瞬の間小ありしを輜小
のせり引く或ハまハ山小九曲ある中ハ件のごとく小傳りし薪の
輜小乗り片足をあそびせり是ゆて楫をとり船を走らせりて
難所を除く数百丈の麓小なる一ツも過と云其術学ぞり
自然小得る処奇く妙くあり

輜を引て薪を伐と云いありせり行と云ハ三三人の食を草ゆて編
る袋小にして輜小なりと云あり山鳥よと云をありてむらぐり
きりり袋をやがりて食を喰尽を樵夫と云を去る今日生業と云
ことありたまりしや焼飯小せんと云打より見まハ一粒ものことハ鳥
どのハ樹上小ありと啼人ハむらぐり鳥を睨り詈り空肚をかつと云
輜哥もいぞ輜をひきと云り事もありと云その人のくありき
そりをひくありと云と云是を輜哥と云と云らる樵哥あり

唱哥の節も古雅あるものあり親あるひは夫山小へり轄を引てうへる
 小遠く轄哥をききて親夫のうへをあり轄小遇処まむふ小いそ親夫
 をへ轄小積る新小跨せと妻や娘かこをひきつこも又轄哥を
 うたうてうへるなど質朴の古風今目前小存せり是繁花をあらざる幽
 僻の地あるゆゑあり

春もや景色とのふらひ梅も柳も雪ふらうづり花も緑も
 あらうのきうふこもゆきまご二月の空のふらふあをまごのうら
 窓のゆふ小書讀をりも遠小轄哥の聞ふらふ小春めきとうは
 是ハ我のこ小あはる雪国の人の人情ぞり

百樹曰我が幼年の頃ハ元日のあはしより扇くと市中をうらあ
 りく声あるひハ白酒の声も春めきと心も朗ありしは此声
 今ハあり鳥追の声ハさうあり武家のつぎと町小遠所ハ

江鯨の鮪鯛のまとうる声今もあり春めくものこ三月ハ
 桜草うら声小花をひひ五月ハ鯉く小白妙の垣根をあらふ
 七夕の竹やまハ心涼く師走の竹やくハ竹ありあり聞小忙物皆
 季小應トて声をきり情小入る事天然の理あり胡笳の悲も又
 然らん件の小人の声ありまうてや春の鶯あひハ蛙夏の蝉秋
 の初雁鹿虫の音又の水鶴をや本編轄哥をきき春めきえう
 まうとハ真境實事文客の至情あり我是小感トて小教言
 を置く轄哥の春めくこと江戸人ハおひもようさる奇情あり
 こま小似らる事猶諸国小もあづり

糞をのまる轄ありこまをのまるや小く作りたる物あり二三月の
 こらも地とく雪あはるはあく渺くくも田圃も是下小在り持
 分の境もさうふらうらぐり志る小かの糞のそりを引くこ小來り

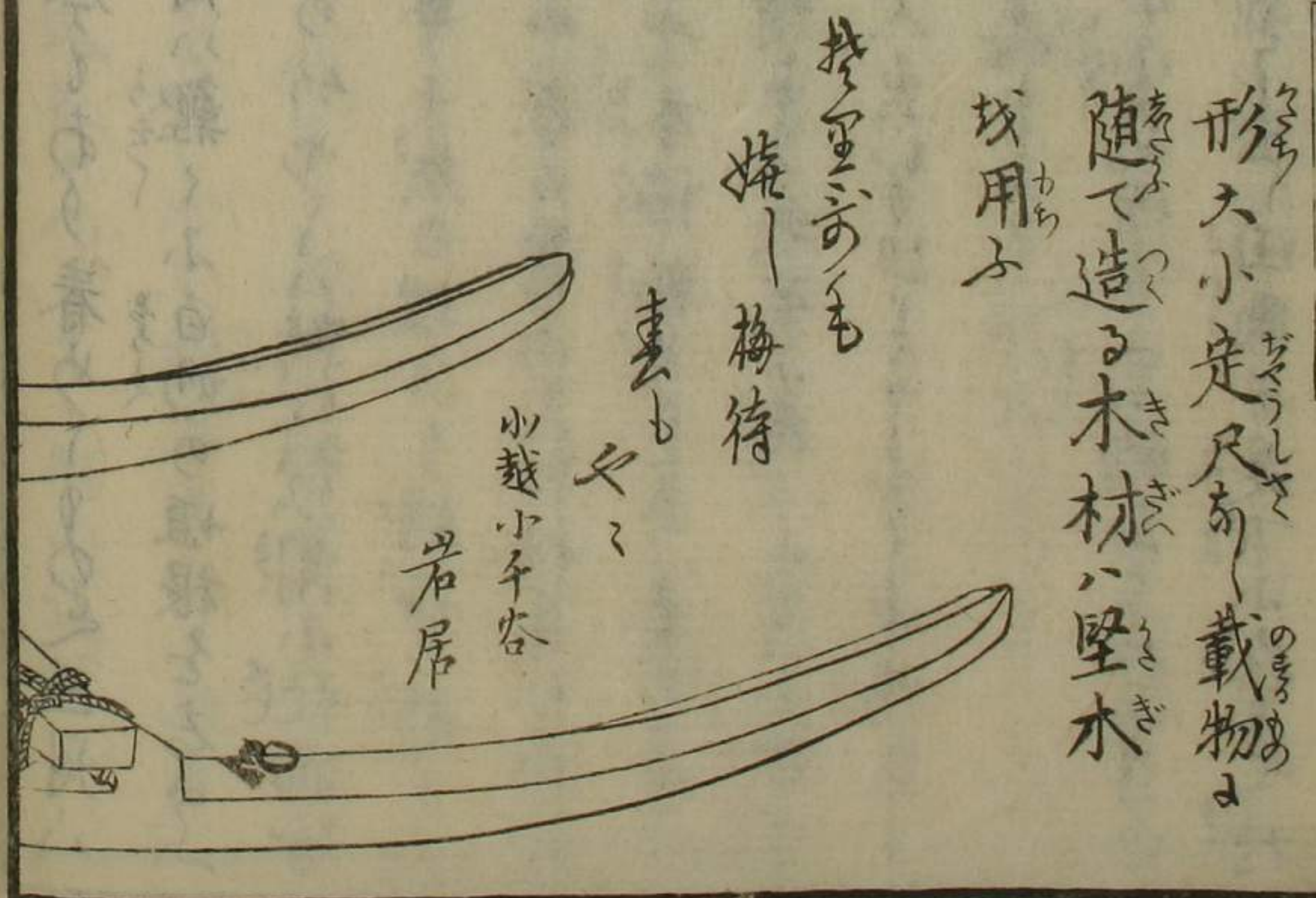
秋月産牧草



見童垂氷を
鞘のそ大持の

つら

輜全図



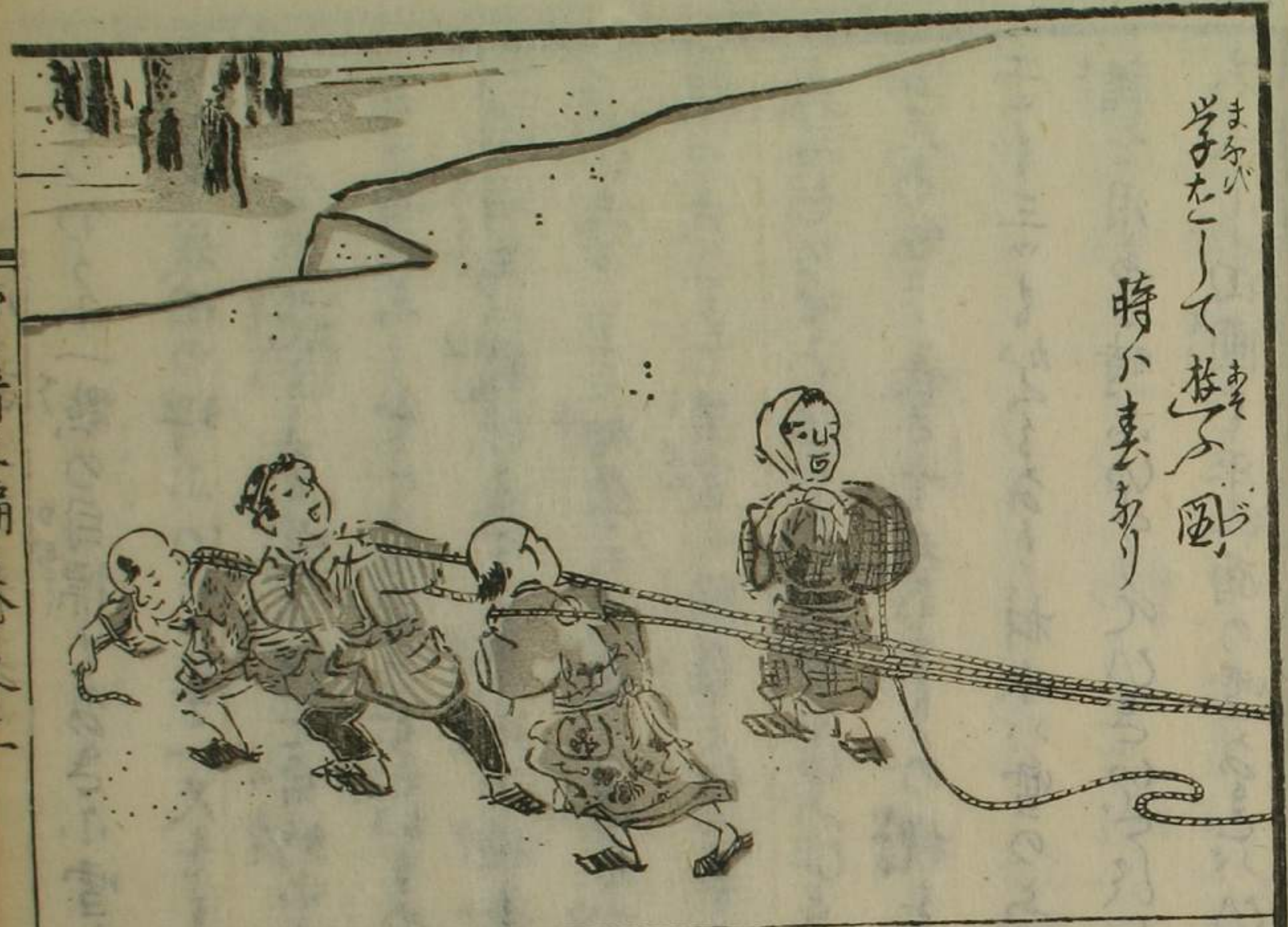
形大小定尺あり載物
随て造る木材ハ堅木
以用ふ

梅待

妻も

小越小千谷
岩居

まゝ
学たして
時ハ妻あり



文楽堂蔵

十九

文楽堂蔵

雪のわふ一點の目標もあまふ雪を掘くと井を掘が如く小く糞を
入る小我田の坪ふらる事一尺をもあやむる事我が農奴等もさる
事あり荒く雪上何を目的めあふかかふる事と問ひ小目あふ
さる事ハあ心ふらざとちの所との坪小をあ事ありとい
つり所為ハ賤けまごも藝術の極意もあ小あつてあゆふ
つ小あつて初学の人藝小進の一端を示す

輜の大なるを里言小修羅といふ事前小ありて大材木あるハ
大石をのせひくを大持といひて京都本願寺御普請の時末口
五尺あり長さ十丈ありの榎をあ事ありさかふる時ハ修羅を
二ツも三ツもかふるあり材木ハ雪のふらる秋伐りてそのまあ山中小あき
輜を用ふる時小ありてひきいひかふる大材をもあ雪の堅さを
あつて田圃も平一面の雪あつてひきいひて直道小ひきいひて其

舟あり修羅小大綱をつけ左右小枝綱のくもあありてさあ小
本願寺御用木といふ職を二本持つ信心の老若男女童等あも賤の
如くあつてひきいひて木あ音頭取五七人花やうあ色木綿の衣
類あの魔あ採て材木の上ふありて木あをうあその哥のあ小
アあ見あ耳あ母の胎内あ時小笹の葉
をのあ大持あ花の都あなりたあ
同音小
見曹あ手遊の輜ああり氷柱の六七尺もあるをとり小のせあ大持
のあ木あをうあ引あて戯あをあ暖国あ
ああ事あ猶輜あ種あの話あ
ああせり

○春寒あの力あ

春ふり雪は寒氣地中より氷結あぐるその力礎をあげく椽を
 反しあひの踏石をも持あぐる冬ふり雪は寒氣とあつる事あり
 さまばこそ雪も春の凍る輪をもつらふるは屋根の雪を掘のけつて
 上げあぐるを里言ふ掘揚とあり前も往來の路も掘あげあり山
 をあもめ冬春雪のことわふり雪の山小箱梯のごとく階を
 作りて往來のたよりとせらるる所のつらふもあもめ冬下踏の齒小
 釘をあぐる打て蹉跌さる為とせ唐土あもめ是を標とて山小のつらふ
 まづさぐる履とせ標和訓カシジキとあり

○シガ

冬春ふり雪は寒氣物小あもめ霜のむきさるやうなる是を里言ふ
 シガとの小戸障子の隙より雪の気入りて坐敷小シガをあす時あり
 此シガ朝暾の温氣をうくる処の小解とあつる春の頃野山の樹木の下

枝ハ雪小うづもさるも梢ハ雪の消さる小シガのつきさるハ玉のて作り
 する枝のやうやく見事あるものあり川辺あもめさる者ハ髪うけの毛
 あもシガのつく事あり此シガ我ガ塩あけ沢あけ小あもめありあもめ郡の中
 小出嶋あもめありあもめ大河小近きあもめ水氣の霜とあもめあもめあも

○初夏の雪

我國の雪里地ハ三月のところ小の雪ハ次第しだい小消朝あさハ凍こと鉄石の
 如くあもめ日中ひちゆうハ上より下よりあもめ月末げつまつハ雪ハ目めあもめ
 るやど小昨日きのう今日けふと雪の丈け低くありあもめ雪も降ふまると雪圃ゆきほと
 りと取のけ家のやとり庭あもめ雪をも掘あつる小雪凍りて堅かきあもめ
 雪を大鋸おほのこぎりあもめ大鋸おほのこぎりの里言ふひきさるるその四角あもめ雪を脊負せかひ
 あるハ擔持おほのこぎり小あもめ暖国の雪とハ大小異り雪小枝を折おとと杉
 丸太をてへるあもめりりりげあもめ庭樹あもめ解とけハあもめあもめ梅と

雪の中ふ蒼をうくまへ春待ちありとま春の末あり此時ふりて去
 年十月以來暗うり一坐敷もやうく明くあり一盲人の眼のひくま
 ころ心地せうま一離はうまも桃の節供の名のまゆと花はまうま
 あり四月ふりてま田圃の雪も斑ふきえと去年秋の彼岸ふ時う野
 菜のま雪の下ふ崩しを梅ハ盛をま一桃櫻ハ夏を春とま雪ふ
 埋りたる泉水を掘りてや去年初雪より以來二百日あまり黒闇の水
 のまふありし金魚鯉鯉あんどうまうげふ浮泳も言やと一うまや
 とらま一五月ふりて人も人の手をつけざる日蔭の雪ハ依然とて山を
 あせり況や山林幽谷の雪ハ三伏の暑中ふも消ざる所あり

○削氷

百樹曰余丁酉の年の晩夏豚兒京水を従て北越ふ遊一時三國
 嶺を踰一ハ六月十五日あり一ふ谷の底ふ嘗をまて

足の中ふ雪を聞て我もま一谷をりてまの山
 拙作のまも實境あるま記を此嶺らち一四里山径隆崎
 数武も平坦の路を踐む浅貝といふ取小宿り猶二居嶺ニリを越
 て三侯との山取小宿一芝原嶺を下り湯沢小抵んとま途
 遙小一楹の茶店を見り庇のめと小床あり一浅き箱やうのめふ
 白く方ある物を置たる遠目ふと石花菜を賣るん口ふ上
 まとまひまも山をま暑まけ一汗もまふ足も
 つまてま茶店あるま一京水とまふ一まのりて腰を
 うけかの白き物を見まとてんふあま雪の氷ありけり六
 月ふ氷をま事江戸の目ふ最珍一けままより一熟視バ
 深さ五寸計の箱ふ水をまその中小き踏石やどの雪の氷を
 おきりり賣茶箱小問バこま山蔭の谷ふありめ一たまうら

まきめんとしりふさむとむひらきば蒟菜刀を把盜のあつさく
 と音く削りし豆の粉をうけしり氷小黄の粉をうけし
 る江戸の目小見も慣を可笑けし京水と相目く笑を志ひ
 つは價をととまて今もさう豆の粉をうけしをさうし
 掛小用意しる砂糖をうけし削氷小齒もうくさうり暑を
 こまきさ珍しき事しんごま

そもくこのけがり氷との物を珍味とする事古書小散見せ
 その中小定家卿の明月記小曰「元久二年七月廿八日途より和
 哥所小参る家隆朝臣唐櫃二合を取寄らる。破子。凡。土器
 〇酒等あり又寒氷あり自刀を取り氷を削る奥小入る事甚し」
 本書ハ件ハの元久二年乙丑より今天保十一年まで凡六百三十余年を
 漢文と歴て古人の如く削氷を越後の山村小賞味しる事珍ととまて

奇ととまて一實小好古の肝を清くせ

〇按ふひとの氷の本訓とありと訓ハ寒凝の義ありと士清翁が和
 訓栞小りり氷室といふ事俳諧の本寄といふものありとありとえ
 といふ普人の知りたる事や周禮ありて唐土のむりや
 ありしことあり 御国ハ仁徳紀小見とて古きを

延喜式小山城国葛城郡小氷室五ヶ所をいせり六月朔日
 氷室より氷をいづ朝庭小貢献をを諸臣も領賜事
 年毎の例ありあり前小引明月記の寒氷ハ朝庭より
 の古例の賜ありありとありと削氷を賞味せし
 七月廿八日あり六月朔日ありと氷七月廿八日まで消るあり
 へき明月記ハ千字百纂の書あり七六の語とて氷室を
 出し六月の氷朝を待てを蓋貢獻の後氷室守が私小出をも



六月 鬻雪圖



あつてはるべのさく氷室と厚氷を山蔭などの極陰の地中小藏
置屋を作りつけ守らる古哥あもよめる氷室守是あり其
氷室ハ水の氷残をさあけやう小諸書の注記あも見え一ツ水の
氷とて不潔なり不潔をのりて貢献あはるす且水の氷ハ
地中小存りて消易ものあり是他あり水ハ極陰の物ありあ
陽小感ト易ゆえあり我越後小削氷を視て思小かの谷間小
在といひ天然の氷室ありむの氷室といひ雪の氷りむろ
あつて極陰の地小藏を作り屋を造り掛別小清淨の地小垣を
めぐりて人小踏せを鳥獸も穢さらず而雪を待雪あもむ
此地の雪をかぬ竅小撞こり埋り人は是を守り六月朔日は用最
清淨あつて所を貢献せしめん欽是己が臆断を以て理小就て古
の氷室を解するあり

○氷室の古哥枚挙つてどかの削氷を賞味し玉ひる定家小
拾遺愚州 夏あつて秋風なむぬ氷室山らふ冬をこのこととあつて
又源の仲正小 千載集 下さるる氷室の山のを梅さえのこりて
雪うとぞ見る かの哥氷室山のおを櫻を消残りて雪小見とた
一首の意氷室ハ雪の氷あつてどかの今加州候毎年六月朔日
雪を献ト玉も雪の氷ありこととて古の氷室ハ雪の氷あつて
あつてのづかの茶店も雪の氷をめぐりて物小ひふその
次日より塩沢の牧之老人が家小在り日毎小氷とて賣来る
山家の老婆あつて掌やとるを三錢ふらるるら二三度賞味
せしものちハ氷とてめぐりて物を得がたハ珍らつて
得易いめぐりて人情的の極あり塩沢小居る六月の氷の
めぐりてをわりの吉野の人らりの花とてわりの松

鳥の人ハ松鳥の月ともおのまじくふりつるまじく飽ざる物の孝心
あり我子の顔と藏置黄金の光あり

○雪の多少

越後国南ハ上州小隣^{小隣}魚沼郡あり東ハ奥州羽州^{羽州}隣^隣蒲原郡^{蒲原郡}岩船
郡あり国堺ハいづとも連山波濤をあるも雪多^{雪多}東北ハ鼠ヶ岡^{鼠ヶ岡}岩船
出羽の西ハ市振^{市振}越中の堺^{越中の堺}小至^{小至}の道八十里間都^都北の海濱あり海気小よ
りて雪一丈ふい^{一丈ふい}てぞ年^年少^少あり又消^消も早^早頸城郡の高田ハ海を去事
遠^遠くても雪深^{雪深}文化のさぐり大雪の時高田の市中^{市中}雪小
埋^埋りて闇夜のごとく昼夜をさぐる事十余日市中燈の油^油尽^尽て諸人難
免^免せし小御領主より家毎小油を賜^賜ひ事あり此時我塩沢も大
雪ふりて夜昼をさぐるべ家雪ふりづまりて日光を見ざる事十四五日^{連日}
あるゆゑ雪をりてあつたべ
家づつまらぬことあり人氣鬱悶^{人氣鬱悶}て病をあるもふい^{ふい}てさるもありけり

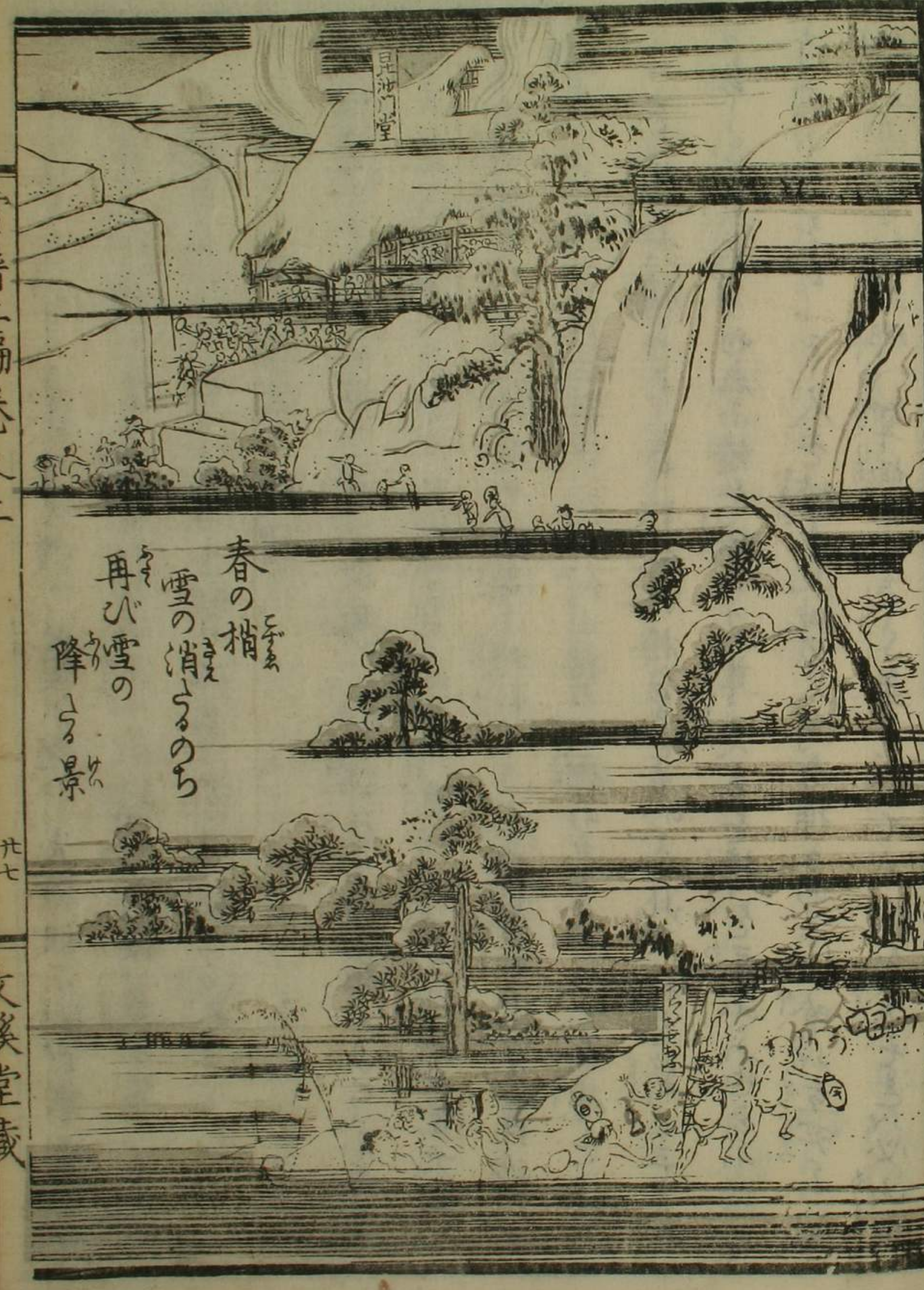
百樹曰余牧之老人カ此書の稿本小就^{稿本小就}て増修の説を添上梓の
為^為小傭書^{傭書}授^授一本を作^作るをり^{をり}も老人カ寄^寄る書中^{書中}小
當年ハ雪遅^{雪遅}く冬至小成^{冬至小成}ても駅中^{駅中}の雪一尺ふ^{一尺ふ}てぞ此日次^{此日次}て
今年ハ小雪ありんと諸人一統悦^{一統悦}び居^居の所^所小廿四^{廿四}日^日黄昏^{黄昏}より
降^降いづ^{いづ}廿五六七八九日まで五日の間昼夜^{昼夜}ふつる事^事をて一丈
四五尺ふ^{四五尺ふ}てび申^{び申}の毎^毎年^年の事^事あ^ある不意^{不意}の大雪^{大雪}ふ^ふて廿七日
より廿九日まで駅中^{駅中}家毎^{家毎}の雪掘^{雪掘}ふ^ふ混雜^{混雜}い^いて簷^簷外^外急^急玉
山^山を築^築戸外^{戸外}ふい^{ふい}て^て惘^惘り申^{り申}今日^{今日}も又大雪^{大雪}吹^吹小相成^{小相成}家内
暗^暗く蠟燭^{蠟燭}ふ^ふ此状^{此状}をさ^さり申^{り申}何程^{何程}可降^{可降}哉^哉難計^{難計}一同心
痛^痛い^い居^居申^申の^の下^下畧^畧是當年^{是當年}天保十^{天保十}十一月廿九日出^{十一月廿九日出}の尺^尺翰^翰あり
此文^{此文}をりて越後の雪を知^{知る}べ^べ○余越後の夏^夏小遇^{小遇}て小五
穀^穀蔬^蔬果^果の生育^{生育}少^少も雪^雪を畏^畏る色^色あり山景^{山景}野色^{野色}も雪^雪あ

佐浦詣堂押圖



國語二編卷之上

文溪堂藏



春の梢
雪の消るのち
再び雪の
降りる景

國語二編卷之上

九七

文溪堂藏

りしと六つおのりまむ雪の浅き他国小同ト五雜組小部百草雪を畏
むしと霜を畏る蓋雪ハ雲小生ト陽位也霜ハ露小生ト陰
位也とのり越後の夏を視て謝肇淩ハ此説小伏せり

○浦佐の堂押

我住塩沢より下越後の方二宿越六町浦佐との宿ありて小普光
寺との真言あり寺中小七間四面の毘沙門堂あり傳ふ此堂大同二
年の造営ありとぞ修復の度毎小棟札あり今猶歴然と存る毘沙門の
御丈三尺五六寸往古椿沢といふ村小椿の大樹ありを伐て尊像を作り
しとぞ作名ハ傳らむときぬ像材椿をのりて此地椿を薪とすまむ
くろくも祟ありゆゑ小椿を植む又尊灵鳥を捕を忌玉ふゆゑ小諸鳥
寺内小群をありて人を怖む此地の人鳥を捕ありハ喰ハ立所小神
罰ありたとい遠郷ハ聳娘小ゆきと年を歴ても鳥を喰まむ必凶應

あり灵験の照くる事此一を以て知るべし遠郷近邑信仰の
人多しむりより此毘沙門堂小於て毎年正月三日の夜小限りて
堂押との事あり敢祭式の礼格とする小あり福むりより有末
とる神事あり正月三日ハもとより雪道ありとも十里廿里より来りて
此浦佐小一宿一此堂押小遇人もあむ近村ハいれもさきあり

○さて押小来り男女まづ普光寺小入りて衣服を脱了身小持する物も
もどり小置棄婦人ハ浴衣小細帯まきむをたらしあり男ハ皆裸あり
燈火を點むところの七間四面の堂小ゆて裸の男女推入りて錐をた
つこの地より余も若かりしころ一度此堂押小あひか上あげさる手
を下さぐる事もあつてむらど小逼り立けり押との誰ともあつサン
ヨウくと大音小呼り声の下小堂内小充滿する老若男女ヲサイ
コウサイとトをりて北より南へとくくと押又よをりて西より東へ

おどろきと此一かゝり男女僕小元結おのづから髪を剃り
 甚奇あり七間四面の堂の内小裸あり人々ゆりあげ手もちる
 事ありぬりたまふ人の多きをうりまふ此諸人の氣息正月三日の
 寒氣ゆゑ烟のごとく霧のごとく照せる神燈もことごとく為小暗く人の
 氣息屋根より露とあり雨のごとく小降人氣破風よりりりて雲
 のまのづか如く婦人稀小兒を背中小むきびつけく押し有ども
 小の小兒啼おとあはれも常とまの不思議あり況此堂押しさうり
 怪敷をうける者むう一人もり婦人のうらみ湯具をうり
 ありもあまど闇処小雑一人もさうりかめさ事をせずこ
 ちの毘沙門天の神罰を怖るゆゑあり裸あり祈以人氣小く堂内
 の熱とること燃がごとくありゆゑ之願望小よりて一里二里の所より正
 月三日の雪中寒氣肌を射がごとくをも厭む柱のごとき氷柱を裸身小

脊負て堂押しさうりもあり二かゝり三かゝり小くまぶらうあり人も
 熱こと暑中のごときゆゑ堂のやう小ある大なる石の盥盤小入りて水を
 浴び又押しさうりもあり一押しさうり息をまむ七押七踊あて止を定守
 踊といふも桶の中小半を洗ふがごとくゆゑ小人々満身小汗をあらが
 第七をとり目小くさうり普光寺の山長耕夫の長をいふ手小筋を持つ人の手輦小乘
 て人のまへへ入り大音小り毘沙門さまの御前小黒雲が降とモウ
 衆人あんどとさうりのモウ山男米かさうりとさうりのモウとさうりををり
 あつた此さら内摺ハ凶作ありと外とをりあつた又志願の者兼て
 普光寺達もきこ小桶小神酒を入と盃を添て献山男挑燈をりたを
 人をわたりさうり者サ人むりさうりさうり堂小入る此盃手小入る幸
 ありさうり人の儀をりさうり取んとて神酒ハ神小供さうり状さうり人小
 散一盃ハ人の中へ擲ることを得る人ハ宮を造りて祭る其家さうりた

